慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	保健体育の学問体系における位置
Sub Title	Place in which health and physical education occupies in the whole system of science
Author	辰沼, 広吉(Tatsunuma, Hirokichi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1970
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.10, No.1 (1970. 12) ,p.1- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00100001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

保健体育の学問体系における位置

辰　沼　広　吉*

Ⅰ．緒　　言
Ⅱ．対　　象
Ⅲ．方　　法
Ⅳ．結　　語

Ⅰ．緒　　言

保健体育は人間を対象とする部門であるが，学問のうち人間を対象とする場合には人間学があり，これは人間の本質を明らかにすることを課題とする学である。特にいわゆる科学的方法の適用される範囲内においては人間科学として呼ばれるようになった。

しかし，ここで保健体育を考える場合，現代の学問の進歩と合わせて新たな分野の想定を試みなければならない。従って保健体育の学問体系の中における相当位置を考察してみよう。

Ⅱ．対　　象

古来，人間を対象とする場合は周知のように数多くの方法があるが，一般には自然的人間，歴史的人間，形而上的人間の三相から本質的に規定されているが，はたして我々の保健体育がこの内でどのような位置にあるかを先に考察してみよう。

しかし，唐突に保健体育という言葉を提出しても，それはあまりにも在来の学問体系からは飛躍的であるために，それが所属するところの一般的慣用語から出発することが理解に容易であろう。

従ってここで保健体育を広義に解釈して人間の主体性から文化行動にいたる過程をとりあげて，そのための身体活動の意味を考えてみよう。周知のように我々は人間的主体の本質を自覚的表現的主体としてこれを文化的主体と考え，更に人間生命をみずから完全に実現しようと努めること，それが文化行動であった。そして身体は人間形成に対する材料としての単なる素材

* 慶應義塾大学体育研究所長・教授

ではなく，本来表現的自覚性を本性とする生命を高める客体的な存在であり得る。ここで身体活動は本質的な意味をもつものであり，文化の主体の根柢から身体に関しては，その強化と技術の向上が具体的課題とならなければならない。

人間の思想が身体を真実に身体として発見し，身体をその真相において理解し始めたのは決して古いことではなく，むしろ最近のことである。身体は主体と自然の間に存在するものであり，歴史的生命の主体は広義の環境という意味から身体的制約の下に身体を媒介として実現されることが出来る。

この事実から身体の本質は歴史的，技術的としての意味が生じる。従って身体的技術が成立するためには行動が必要であり，行動は刺激に対する反応と考えられ，主体が環境から作用され逆に主体は環境に作用する。ここにいわゆる適応関係が認められる。そして主体と環境が対立し，その調和を媒介するものが技術である。

この意味を更に普遍化すれば知性は本来技術的である。すなわち人間の行動は環境形成的であるとともに自己形成的である。このように形成的なものとして我々の行動は歴史的であり，歴史的行動は技術的であるとともに歴史的世界は技術的に作られてゆく。歴史的世界は創造的であり，人間は創造的世界の創造的要素である。ここでいう創造的というのは独立なものが作られることであり，技術は創造的なものとして単に手段とは考えられない。人間の行動は歴史的世界の自己形成にとって手段として働くことであると同時に人間は単なる手段ではなく自己目的でなければならない。

このような身体的行動を設定し，これに科学的方法に従って接近しようとするかぎり，統一的方法を確立することが必要である。一般的に人間を対象に考える人間科学の分類は古くから多くの先人により数多く存在するが，ここでは自然科学（地球科学，基礎科学）に対しての人間科学を考え，これを二つの方向から対象を設定する。

第一に身体過程を基盤とする個の個体内コンミュニケーション(Intrapersonal Communication)で，上位に無意識行動として表現する脳幹，および意識行動として表現する大脳皮質を置き，これらに対する分析的研究の基礎的方法として遺伝学，生理学，心理学が存在する。

第二に自然過程を基盤とする集の個体間コンミュニケーション(Interpersonal communication)で，上位に経済，社会を置き，これらに対する分析的研究の基礎的方法として生態学，歴史学，社会学が存在する。このうち歴史的方法を科学的方法によって推進しようとするならば，社会科学と精神科学の二つの基礎的方法を必要としなければならないから，この範囲外の部分もあるわけである。

これらの身体過程および自然過程の基盤から生じる人間行動をその頂点にもつもので，これが真の対象となるわけである。この対象には更に数学，哲学の基礎的方法が関与しなければな

らない。

ここで設定された人間行動が分析的研究によって推進されるならば，それは現在のいわゆる行動科学としての場が与えられるであろう。

以上のような基礎的背景のもとに主体行動が単に個人的・内面的存在ではなくして，更に社会的・文化的存在であるという価値判断にもとづき，体育，労働をとりあげて対象とするならば，ここにわれわれのとりあつかう具体的方法が抽出されてくるはずである。

Ⅲ. 方　　法

一般に人間の行動を広義に解釈する場合は，その範囲が極めて広く，おそらくすべてが含まれることになるであろう。従ってこの場合は広義の文化的意味における基本的行動として体育，労働に限って対象を限定するが方法的には普遍化されるべきであり，またそうなることを期待するものである。すなわちそれは主体性への帰納に至るはずである。

しかしこの対象の選択の価値判断は自然過程における現在または将来の経済・社会構造の変革によってそう判断されるのである。

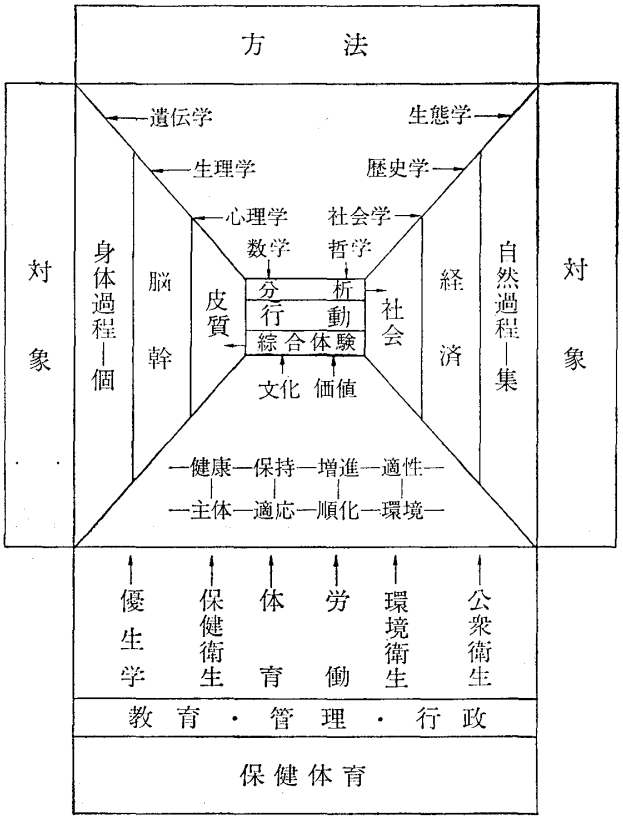
例えば現代産業別編成の社会構造の変遷に対する生産年令人口の推移と平均寿命の延長からくる労働年令の中年層への移行および産業の機械化にともなう労働内容の質的変化に対しては，あくまでも健康の基本的確立と，その保持に向けられなければならない。

その結果，第一に社会構造の変化からしても労働時間の短縮と労働密度の増加すなわち能率向上がとなえられ，すでにＩＬＯでも認められているところである。

第二に労働時間短縮は能率上の問題ばかりでなく生活思想のうえからも，拡大した余暇時間の生活における価値も高まってくるようになるであろう。すなわち，みずからの生活の中で余暇を自由な時間として楽しむことが人間として望ましいという考え方になるであろう。更に広義でのレクリエーションとしての解釈がここに成立してくるはずであり，同時に体育の生活における価値も高くなるはずである。そしてそこに本来の意味で自由な基本的健康の合理化が考えられる。このことは現在の都市集中化の人口構造からくる大衆スポーツの隆盛がこれを実証するところである。

従って対象である人間行動を基本的には主体を環境に向かって適応・順化する過程を基盤に考え，健康を保持・増進せしめて適性をもつに至る過程を持たなければならない。もともと生物界で遺伝は静的保守的な原理であり適応は創造的な原理であって，この二つの争いから新しい特質を獲得するのである。これが具体化に関して従来我々の分野に与えられた部門を対応させるときは，行動に関しては体育，労働が，自然過程に関しては環境衛生，公衆衛生が，身体

表　1



過程に関しては保健，優生学が該当することになる。勿論これらの部門には更に細分化され特殊な部門が発生してしかるべきである。更にこれらの学問は社会との接点において教育，管理，行政の項目がなければならない。（表1）（表2）

ただここで行動についての科学的方法として，従来は分析実証的であったが，更に加えて綜合的体験または経験によって実証されるところに現在の行動科学と多少異なる特色をもつところであろう。

いま，ここで綜合的体験という言葉で表現したが，現在の情報理論からすれば多少不明確な意味であるかもしれぬが，適応順化の理論からすれば下行性網様系の促進作用ならびに上行性網様系の抑制作用による慣れの現象であり，それは体性感覚と合わせて実証される。そしてこれらの集積は情報の集積と合わせて真の意味での主体の認識に至るものであろう。言葉を変えると価値と事実の結合による主体の認識にほかならない。

これらのことを考慮すると，いわゆる保健体育の対象を人間行動に普遍化拡大解釈するとき健康を基礎にして文化行動としての体育と社会行動としての労働を対象にして，これが分析研究と同時に綜合体験による方法が主となるであろう。また主題にかかげられた保健体育なる用

表　2

対象＼方法	遺伝学	生理学	心理学	数学	哲学	社会学	歴史学	生態学	教育	管理	行政	方法
労働		労働衛生	労働心理		労働原理	労働法経済学社会学	労働史	労働適性	労務教育	労務管理適性検査	労務行政	労務実習
保健	人類学優生学遺伝学解剖学行動発生学	生理学	心理学	統計学	保健原理	行動科学	保健衛生史	生態学環境衛生公衆衛生人口問題	健康教育	保健管理情報処理	保健行政	保健実習
体育	体型発育	体育生理キネシオロジー	体育心理		体育原理	社会体育オリンピック	体育史	体育適性	体育教育評価	体育管理適性検査	体育行政	体育実習（トレーニング）

語の内容を行動という対象に普遍化すると，身体過程ならにび自然過程を基盤として体育を考えるときは，社会行動としての労働にまでその範囲を拡大しなければならないことを知るのである。

Ⅳ. 結　　語

1．行動を身体過程（個）と自然過程（集）の基盤のうえにおく。

2．行動のうち，価値判断により文化行動としての体育ならびに社会行動としての労働をその対象に設定する。

3．この対象を主体から環境の間に適応・順化の理論により展開する。

4．展開された各部分について遺伝学，生理学，心理学，社会学，歴史学，生態学的方法により分析研究する。

5．分析された事実を総合体験により実証する。

参考文献

1) 辰沼広吉：保健体育の対象と方法に関する私見，慶應義塾大学“体育研究所紀要”第3巻，第1号，1頁，昭38。

2) 辰沼広吉：新制大学に於ける体育の価値，慶應義塾大学“体育研究所紀要”第7巻，第1号，1頁，昭42。